

9月 27日 (日) 列王下 19章	「見よ、わたしは彼の中に霊を送り、彼がうわさを聞いて自分の地に引き返すようにする。彼はその地で剣にかけられて倒される」(7節)。これはヒゼキヤ王の家臣たちに語ったイザヤの言葉。アッシリアの王センナケリブがユダの町に攻め上ってきた時、王の側近ラブ・シャケの威圧的な脅しの言葉に対してイザヤの預言が成就する。主はユダの民を守られた。
28日 (月) 列王下 20章	「わたしはあなたの寿命を十五年延ばし、アッシリアの王の手からあなたとこの都を救い出す」(6節)。これはヒゼキヤ王に向けられた主の言葉。ヒゼキヤ王は死の病にかかり、イザヤから「命はないのだから、家族に遺言をしなさい」(1節)と言われた時、涙ながらに主に祈ったところ、この救いをいただいた。主は、主のためにこの都を守り抜くと言われた。
29日 (火) 列王下 21章	「彼らは先祖がエジプトを出た日から今日に至るまでわたしの意に背くことを行い、わたしを怒らせてきたからである」(15節)。マナセがユダの王になった時、その行いはあまりにもひどく、主を怒らせた。マナセの父ヒゼキヤのように主の目に叶う王もいたが、出エジプトからこの時代まで人々は主の意に背き続けた。そして、その後バビロン捕囚となっていく。
30日 (水) 列王下 22章	「わたしの怒りはこの所に向かって燃え上がり、消えることはない」(17節)。主に対して正しいことを行なったヨシヤ王は、祭司ヒルキヤが発見した律法の書の内容を知ると、衣を裂いた。そして、側近たちを女預言者フルダのもとに遣わし主のみ旨を尋ねさせた。彼女は「主の怒りは燃え上がり、消えることはない」と。主に対するイスラエルの罪は重い。

10月1日 (木) 列王下 23章	「彼は祭司ヒルキヤが主の神殿で見つけた書に記されている律法の言葉を実行した」(24節)。ヨシヤ王のように全くモーセの律法に従って、主に立ち帰った王は彼の先にも、後にもいなかった。なのに、主に対するマナセの重い悪のため、主はユダに向かって燃え上がった激しい怒りの炎を収めようとなさらなかった。そして、重い苦しみを受けることになる。
2日 (金) 列王下 24章	「そのころ(ユダの王ヨヤキンの時世)、バビロンの王ネブカドネツアルの部将たちがエルサレムに攻め上って来て、この都を包囲した」(10節)。バビロンの王の治世八年に初めのバビロン捕囚となった。国の中の貧しい者以外は全て捕囚となった。バビロンの王はユダの王ヨヤキンも捕囚として連れさり、ヨヤキンのおじのマトンヤ(ゼデキヤと改名)を王とした。
3日 (土) 列王下 25章	「ゼデキヤの治世第九年の第十の月の十日に、バビロンの王ネブカドネツアルは全軍を率いてエルサレムに到着し、陣を敷き、周りに堡壘を築いた」(1節)。これはゼデキヤ王の第十一年に至った。ゼデキヤ王は捕まり、彼の目の前で王子たちは殺され、彼は両目を潰されバビロンに連れて行かれた。これは、主が赦さなかったほどユダの罪が重かったからだろう。
4日 (日) 歴代上 1章	「アブラハムの子は、イサク、イシュマエル。彼らの系図は次のとおりである」(28-29節)。歴代誌は南ユダ王国(ダビデ王朝)の興隆と亡国を描くが、その冒頭でアダムからヤコブまでの系図に連なるすべての名を丁寧に紹介する。今、南ユダに敵対している周辺国の人びとも、神の深い慈しみの中に名を覚えられてきたことを記さずにおれなかったのだろう。